

冬着が買えない

都庁前困窮者支援

師走に入り最初の土曜日を迎えた3日、生活困窮者支援団体が東京都庁前(新宿区)で食料配布や生活・医療相談を行いました。配布1時間前から長蛇の列ができ、5000人が食料を受け取りました。この間、利用者は増え続けています。物価高騰も続く中、政府の対策が「遅すぎる」との声がありました。

(小林孝子、小酒井自由)



寒さのなか薄着で並んだ男性。支援物資のなかには、カイロやインスタント食品が入っていました=3日、東京都庁前

区IIがいました。「カイロを何枚か貼って寒さをしのいでいます。上着は1着だけあるが、汚れてしまっし、よっぽど寒いときにしか着ないようになっています」と嘆息をします。

物価高騰が収まりそうにない現状に「ただでさえ生活が厳しかったのに、物価高で先行きが不安です」と視線を落としています。

婦人服の小売店の契約社員です。新型コロナウイルス感染症の影響で店は閑散とし、シフトや勤務時間が減らされ、残業もなくなり手取りは5万円減りました。

約7年前に就職した今の仕事は、正社員の職が得られず「やむなく契約社員」といいます。「コロナで休んでも手取りも少ない。コロナにならないうつ外出は、仕事で入るのへんです」。正社員の仕事を探していますが「せめて食料品だけでも生活費を下げてほしい。それだけでも生活は

全然違う」と訴えます。

暖房費増が不安

今回初めて支援に並んだという女性(53)は「北區IIは今夏、一家でコロナにかかりました。女性は、せきと鼻水の症状が続いています。勤めていた飲食店を「休みがちになりお店に迷惑になるから」と、10月に辞めました。

弟は5年ほど前から体調が悪く仕事ができません。80代の母親の国民年金と貯金を切り崩して生活しています。

母親の年金は2カ月で7万円程度。「家賃7万円に光熱費が1万5000円くらい。食費は1日3人で2000円ほどを抑えようと話している」といいます。「1台しかないエアコンが古いので、壊れないか心配。物価高騰で節約しています。暖房は減らすわけがいかない。コロナがはやってる間だけでも、消費税を下げてほしい」と訴えました。

食費3人で1日2000円以内に ■ 公的支援「遅過ぎる」

現金給付にして 支援活動を続ける「NPO法人自立生活サポートセンター・もやい」の大西運理事長は「月初めは生活保護費や給料が出たばかりで、利用者は減る傾向にあるのに今日も多い」と指摘します。

年末年始にかけて日雇いの仕事が減り公的機関も閉庁する中で支援を求める人は増えます。「マ

00人近くが来る可能性はある。物価高が続く中、今すぐ支援が必要ない人には現金給付がいい。対象もワーキングプアの人まで広げてほしい」と述べました。

いつ生活保護利用者の男性(48)は「杉並区IIは、この間の水光熱費がそれぞれ20000〜30000円増しました。自公政権で生活保護費が下げられる一方で食料品は値上がり、負担は増すばかりです。冬物はこの日着ていたフリース素材のスポンとジャンパーだけ。政府の生活困窮者支援の現金給付もいまだ届かず」消費税が上がって物価高も続くのに政府は対策が遅すぎる。生活保護費は増やすべきだ」と話しました。